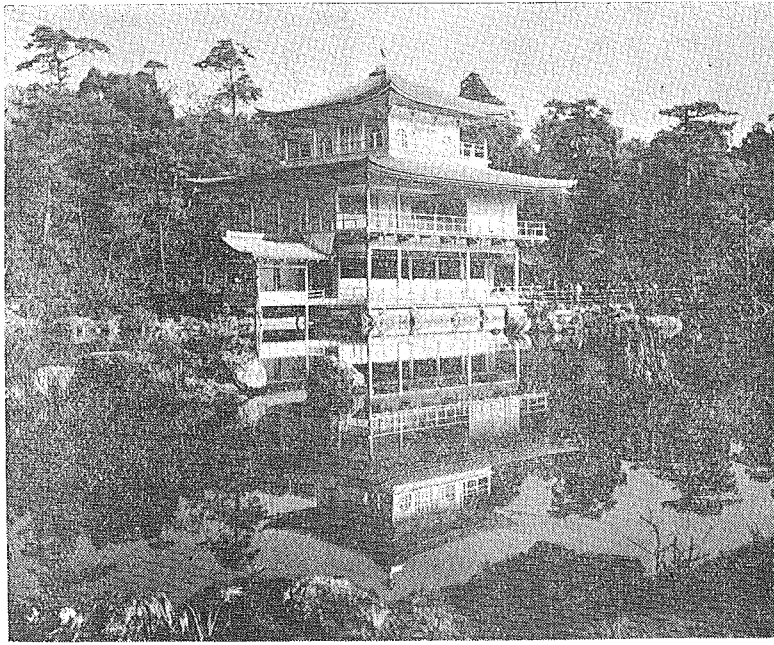


洛友会々報

京都市左京区吉田
京都大学工学部
電気科教室内
洛友会



金閣寺は焼けて再建せられた。会員の中で、さびた金閣寺の美しさに心を奪われたものと、再建の真新しい金びかに目を見張った会員とある。丁度、戦前と戦後とのような感じだ。何にしても、京都大学に学んだものには忘れられない名所である。

第六回洛友会総会記録

四月二十八日午前十一時三十分より、嵐峽館広間において大谷幹事司会の下に開かれた。
鳥養会長が議長席につき開会の挨拶があつて議事に入り、山村幹事より昭和三十一年度事務並に会計報告(別項)があり、次いで会則一部変更の件(既報)を上程審議し満場の拍手裡に可決した。従つて昭和三十一年度よりは正会員の会費は年額四〇〇円に改められた。これによつて昭和三十一年度の収支予算も別項の如く可決された。
これを以て全部議了し、時に十一時四十五分であつた。

総会出席者

鳥飼 会長	末蔵 明39	山岡 景範 明45
田中 稔 大3	上林 一雄 大6	光野 重威 大6
阿部 清 大7	山村 忠行 大6	工藤 寿雄 大7
加藤 信義 大7	間崎 龍夫 大7	品川 秀雄 大7
今田 英作 大12	本多 静雄 大13	奥谷 久彦 大13
高田 豊 大13	岐美 忠雄 大13	大久保 達郎 大14
橋本 真吉 大14	田中 卓治 大15	西枝 一江 昭2
小池 恒久 昭3	木村 重憲 昭2	岡本 督 昭4
上西 亮二 昭6	久野 清 昭4	山本 茂雄 昭6
山本 洪二 昭6	大西 正一 昭6	吉田 勇夫 昭7
井上 昌博 昭7	竹内 貞美 昭9	和田 昌博 昭7
野口 昌博 昭7	林田村 善一 昭9	辻 藤吉 昭10
香山日出雄 昭10	中堀 孝志 昭10	大谷 泰之 昭13
大谷 清 昭14	川村 進 昭12	山本 淳一 昭18
池上 淳一 昭18	近藤 文治 昭18	露木源一郎 昭19
	龍沢 善信 昭27	

昭和三十一年度收支決算

自昭和三十一年四月一日
至昭和三十一年三月三十一日

一、収入の部	五五二、〇〇〇
会費	四一四、〇〇〇
本年度分	一三八、〇〇〇
過年度分	八、六五四
預金利子	八、七〇〇
雑収入	二八一、九七八
繰越金	八五一、三三二
合計	五五二、〇〇〇
二、支出の部	三四八、八四七
刊行物費	一五、〇一〇
名簿編集費	一三七、八四〇
同印刷費	五七、九七一
同発送費	二、八〇四
同報集費	五七、一八〇
同印刷費	七八、〇四二
同発送費	二二〇、二九〇
諸費	九〇〇
備品費	四、一四〇
会費	七〇、五〇六
總會費	五二、二四四
會費集金費	六〇、〇〇〇
諸掛費	三二、五〇〇
旅費	三五、一二六
臨時費	三五、一二六
懇談会補助	二四七、〇六九
次年度繰越金	八五一、三三二
合計	五九〇、〇〇〇
一、収入の部	五九〇、〇〇〇

本年度分	五六〇、〇〇〇
過年度分	三〇、〇〇〇
預金利子	五、〇〇〇
雑収入	八、〇〇〇
繰越金	二四七、〇六九
合計	八五一、〇六九
二、支出の部	三九〇、〇〇〇
刊行物費	一五、〇〇〇
名簿編集費	一七〇、〇〇〇
同印刷費	六〇、〇〇〇
同発送費	五、〇〇〇
會報集費	六〇、〇〇〇
同印刷費	八〇、〇〇〇
同発送費	二六〇、〇〇〇
諸費	一〇、〇〇〇
備品費	一〇、〇〇〇
會費	七〇、〇〇〇
總會費	五〇、〇〇〇
會費集金費	六〇、〇〇〇
諸掛費	六〇、〇〇〇
旅費	六〇、〇〇〇
臨時費	四〇、〇〇〇
懇談会補助	四〇、〇〇〇
予備費	一六〇、〇〇〇
合計	八五〇、〇〇〇

東京支部臨時会合報告

四月五日午前十一時より帝国ホテルにて電気四学会春季大会に母校より先生方が多数上京されたので臨時に懇親会を開いた。

異文支部長の司会で、岡本、阿部各名譽教授、加藤、大谷両教授より有益なお話があり食事に移り、食後ロビーで大いに歓談した。出席者は
岡本 先生 阿部 先生
加藤 先生 林重先生
大谷 先生 佐藤 先生
佐藤 徳明 44 古田 正康 明45
長島 正隆 大3 楠木宗次郎 大7
堀岡 正家 大9 菅 琴二 大9
大内 誠三 大12 小森 修二 大12
松本 弘 大12 高島 正一 大13
巽 良知 大13 田中 登 大13

昭和五十年三月十日
 洛友会 昭和五十年記念
 大坂 野田 高野 清水 伊藤 山本 井原 正木 佐々木 中野 野田 清野 稲田 平田 大杉 今井 秋田 河野 清水 (他に安岡出席)

去る四月十三日、大阪の曾根崎新地の朝日料亭に頭髪の薄いもの、ロマンスタイルのもの、なお黒髪のみさく〜と茂れるものなど、つどいつどいて十三名、喧しく賑やかな懇親会が催された。昭和五年組の会である。十三名は入院加療中の朝山君を除いた関西在住の全員で、なんと全部が都合よく揃ったものかと思心させられる懇親会であった、松田先生をお招きして先生を囲んで懐旧談に花を咲かせたのふけるを知らなかった、昭和五年卒で最も若い者で満四十九歳であるから、推して人生のトップコンディションに立てる者ばかりであることを知るべきで

昭和五十年記念
 卒業二十周年を記念する同窓会、如何にして多数会員を動員するか、幹事一同大いに頭をしばった結果、東京と大阪で同時開催という珍案がまとまった。時は三月三十日、所は第一会場大阪玉江寮(電々公社)、電話で結ぶ二元クラス会

昭和十二年会
 二十周年記念

第二会場学士会館、両会場を電話で結び、通研得意のプリント配線トランジスタアンブでお互の声を会場一杯に流そうという仕組み。正木幹事長は早朝から大阪会場に乗り込み、通話テストも怠りなく、本番もまずまず成功とは相成った。

第一会場は名古屋組、九州中国の連来組、東京からの参加もあつて十六名、第二会場は十名、全出席率は七十二パーセントで予期以上の好成績、これも二元式のお蔭と自慢して置く次第、ただし御案内を差上げた名譽教授、現役教授の諸先生はお差しつかえで全部御欠席とは残念の極み。

両会場とも幹事長苦心の会員家族写真と記念文集を配布、まずは懐旧談に花を咲かせ、やがて人生観、処世論など酔々と共に話は尽き、子供の嫁さん婿さんの依頼まで飛び出すはチト気が早い。東西呼応してプチまくった怪気焰も種切れとなれば、次期二十五年、三十年の記念会を約して、東は九時、西は十時半それぞれ解散。大阪会場はメートルを上げ過ぎて予算超過五割、あと始末に四苦八苦。

翌三十一日には、二十年間一度も教室を訪れたことなしという心掛けのよい九州中国組、N君の自家用車を駆つて来学、卒業記念樹を仰ぎ見て感懐ひとしおの態であつた。(平田穰・清野記)

昭和十六年
 四月卒業共振会

四学会連合大会開催の機に四月四日東京米川荘で十五年振りに藤・林(重憲)両先生をお迎えして開かれた。四十四名に案内したが左記の十六名が集

昭和十年卒業クラス会
 去る二月十二日昭和十年卒業生の中、東京地区在住者のクラス会を日立大崎別館にて開催した。当日は、日本放送協会の経営委員会に出席のため、毎月上京される阿部先生を招待して懐旧談に花をさかせた。

先生は近來益々御元気で活躍されている御様子がかがえて一層心強く感じた。会合せるもの十二人、日市市からかけつけた高木君を始め、山田、佐野、大曲、小林、有馬、植田(正一)、高田、井上、林、大塚、清水の諸君

であつた。生産性本部関係で米国出張の井上君、仏国出張の高木君の帰朝談を中心に、仲々の盛会の中に一次会を終つた。(清水記)

ある。筆者はちよつとこれから十年後のことを考えて見た。会社を停年退職する人や、重役として止まりなお陸々と羽振りを利用する人や、経済的に苦しむ人や、金に苦労のない人や、家庭的に恵まれる人、そうでない人等々迅速にその人の運命の定めに従わなければならないのであるが、われわれはなおかがやかしい祝福された春秋に富むことを期待したいし、なお元氣を出してそれに向つて努力しなければならぬ。

そういう意味で、昭和五年の同窓会の名前を昭和五年春秋会ということに満場一致で決定し、春秋二回相会して懇親会を開くことに決めた。

当日集まつた連中は寄書の如く加茂忠恒、田中裕、田中武夫、伊藤忠雄、吉留実、白坂、小菅菊夫、井田清、和田正弘、野田忠二郎、山岡武夫、河合次男、占部五郎の十三名である。(伊藤忠雄)

昭和十二年会大阪会場
 (前列右より) 山本、井原、正木、佐々木、中野(中列右より) 川村、野田、清野、稲田、平田(幸)、(後列右より) 大杉、今井、秋田、河野、清水(他に安岡出席)

なお東京会場の方はスリル満点の怪写真が出来たのであつたが、期日に間に合わないで割愛した。



阿部信
 大塚好道
 井上友二
 高田正一
 清水記

氏名	正木二段	富岡二段	白崎初段	松橋二級	今水三級	国枝四級	樋口六級	丸林七級	老田八級	長島九級	萩原一〇級
勝数	3	1	1	2	2	4	4	5	0	3	25
負数	2	4	4	3	3	0	1	0	5	5	4

東京支部趣味サークル
圍碁秋期大手合せ
 時・三一・一一・二二三
 金曜祭日 一〇・二〇時
 処・港区田村町一丁目二
 美松書房 三階囲碁部

昭和五年春秋会
 昭和五十五年四月十日
 於大阪市北区菅原町
 朝日

（賞品）
 一等 丸林
 二等 樋口（萩原氏に決戦勝）
 三等 萩原
 四等 国枝（番数不足の為）
 以上昇級

総会ごぼれ話
 ○総会は四月二十八日だったので、春の行楽シーズンは過ぎていた。全く初夏で、新緑中の新緑の頃。嵐山から小倉山にかけて、淡緑の景色は、又とない眺めであつた。

○千鳥ヶ淵あたりは、アベツク連れのボートが、うるさいように漕ぎ廻つていた。古い先輩には珍しい光景であつたであらう。
 ○天気は生憎曇つていて雨になるかも知れない様子で、洋傘持参の会員も多かつた。
 ○会場から、「花の山二丁登れば大悲閣」の芭蕉の句で名高い大悲閣がある。学生時代を思い起して、急峻な山道で大悲閣に登つた会員は、汗をかいて、山道が前より一層急峻になつていたとこぼしているものもあつた。
 ○大悲閣は荒廃しているとなげく者。嵯峨野や京のあたりが霞んで見えないで、折角の大悲閣参詣も半減されたと嘆く者。

○風山が風水害で傷を受けていた部分が何とかとなく痛々しい感じであつた。ともかくも大堰川に臨んだ嵐山の景色に非の打ちやうはない。

○会場の広間から見下ろすと、保津川下りの遊船が幾つも通つてゆく。川向うの山裾をデール列車と蒸気列車が通る。
 ○広間の舞台には「歓迎洛友会総会」と提灯に一字一字書いて釣つてあつたのは、嵐峽館の商売らしいと噂とどり
 ○鳥養会長の挨拶の中に、本部所在地の京都で開催すると、出席率が悪いの一言があつた。会員には、あまり京都に馴染み過ぎて、他処に行つた気がしないためか、京都に行くと、ひつつかまるか、京都に来ると悪いことがあるかであらう。
 ○そんなわけでもなからうが、来年の総会は、中国支部の地域内で開催することになつた。

若いものにはかなわぬと愚痴る者。
 ○七十五才の老驥をひつさげて上林さん出席。持ち前の気分で、初め小倉山の方に行つたが会場が見当らないので、渡月橋を渡つて嵐峽館に來られたという。一番長い道申した会員。
 ○加藤信義 副島民彦 藤田和也 林重実

昭和十六年クラス会



写真右より
 前列 秋月加藤先生 生林（重憲）先生 岡本 石井
 （中列） 田中 藤田 江副 高橋（碩男）
 （後列） 副島 武田 俣野 滝口 河辺 神崎 安東 深海 角田

各支部地域内で総会をすれば、その支部の会員は、他支部会員にも逢えるので出席することになり引いて支部の発展に寄与することになる。他支部の会員も、変つた土地に行ける喜びもある。
 ○結論としては支部が各々発展して行くことが、会全体が発展する基である。洛友会総会を支部地域に持つて行く事は、直に支部発展につながらず論が強かつた。
 ○今度の総会の目的の一つの大きな問題は「会費の値上げ」であつた。洛友会を維持するのに止むを得ないことではあつたが、何かと議論が出るだろうと予想されたが、事実は深く認識されていたらしく、すらすらと議決された。
 ○神武以来の景気の反影だろうかと言う会員もあつた。然し、我々の栄光ある洛友会は他の学部や教室にない立派な強固な同窓会である。

ことを、会員が認識して居らることに原因していると思うのが常識であらう。
 ○問題は折角の議決された会費を、順潮に納めて下さるか、どうかに掛つている。
 ○総会が済んでから懇親会があつた。久々に逢つた会員同志のなごやかな談笑は余処の見る眼も羨しやうであつた。幹事は何とかして出席会員をよるこぼしたくものだと苦心の結果、もれなく当る福引抽せんを目論んでいた。
 ○それは風車と吹き矢で番号を出し、番号カードに依つて景品を渡すと言うのであつた。
 ○吹き矢が当つて番号が出る度に、どつと歓声が挙つて賑かなことであつた。
 ○かくて時間が経過して懇親会も目出度く終りつた。三々五々、散つて行つた。来年の総会を楽しみにして。

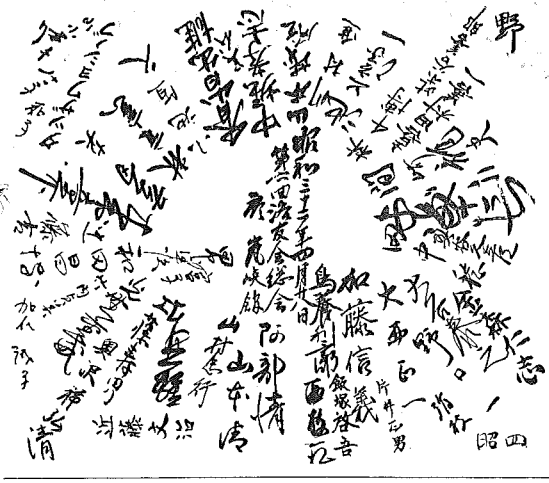
会費領収

三月十一日より
五月十日まで
到着の分

昭和三十二年	昭和三十八年度	昭和三十九年度	昭和四十一年度
昭和三十八年度	昭和三十九年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度
昭和三十九年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度
昭和三十九年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度
昭和三十九年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度
昭和三十九年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度
昭和三十九年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度
昭和三十九年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度
昭和三十九年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度
昭和三十九年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度	昭和四十一年度

短歌日記より

大 七 男
煙霧てふ都会のけがれくぐりつつ朝
の勤めの靴を引きずる
船医となり欧州に行く友の来て甥の
履歴書置きて去りたり
霞より出で霞に消ゆる川大阪城にわ
れ立ちて見る



霧雨の西より襲ひ来て降り向ひの
ビルに蛍光灯点く
遠くより送られて来し里芋の肌白々
と汁に沈めり
定礎式その封じたる物々を後世の人
々貴ぶや否や
崩れたる築地を描くも古都奈良をし
のぶにふさわし春の風吹く
大和文化ここに芽生えし二上山夕日
を受けてうすく霞めり

告別式に参列すれば我身さえ長老の
中に数へられ居り
舗道の泥しつこく靴にまつわれり大
阪の町を小半日歩く

会費について

会の運営は何んと言つても原動力
は金銭でございます。
落友会も会員の御協力で今日まで
順調、少し無理な順調で育つて来ま
した。
そして一寸頭を打つ階段に到着し
ました。そこで、去る四月の定時総
会で会費値上げが議決されました。

これでは滞りなく会の運営が出
来ると思います。
これからは、会員の皆様の御協力
による他はありませんのです。
会費の請求がありましたら速かに
御払込み下さい。これが御協力の最
大のものです。

△編集後記▽

第二十四号の会報となつた。年月
の立つのは早いもので、延ページ
数も百を越えている。
○物事は相手の身に成つて処理する
のが上々の策である。身勝手な話
だが、原稿を下さるる会員が、編集
者の身になつて筆を執つて下さる
と、編集者の苦勞は無くなる。
○一番こまるのは署名の寄せ書きで
ある。紙の大きさは出来るだけ小
さくして、字は濃い墨汁で肉太く
書いて貰いたい。それでないに縮
少するので字の消える部分が出来
て来る。
文章は、一行十六字詰にして下さ
ると、組見本作成の際、誠に便利
で手間が省ける。
字は出来るだけ見易く書いて貰い
たい。印刷所の文撰が、何の字だ
か判別出来ない時、当てずっぽう
の字を組まれ、編集者が校正する
時に困つて、書いた本人の意志に
反する文字や文章になつて仕舞う
恐れがある。

○ああ、こんなことは、よそ。そ
うでないとは原稿が集らない。どう
でもよい。原稿を書いて下さい。
御願いだ。
○会費が値上げになつたからには、
ページ数が増加するだろうかと、
編集者は、目下不安の体である。
○原稿の中で、楽しみにしているの
は、各支部の活動状況であるが、
どうも一向に集つて来ない。充分
活動して居らるるだろうと思はれ
るが発表がない。淋しいことであ
る。

加藤先生記念事業

一昨年は阿部先生、昨年は松田先
生、本年は加藤信義先生が停年退官
せられる事になりました。
誠に淋しい感じが致します。依つ
て、本年秋文化の日に記念の行事が
開催せられるので、既に発起人、実
行委員等は決定しまして、愈々近く
発表せらるる段階に来ております。
愈々発表せられましたら、何分よろ
しく御願ひ致します。

○特に支部活動、
会員消息、海外
国内便り等。

○各時代の会員からの原稿も熱望し
ているが、これも頼と御話しにな
らない。頑張つて下さい。
(工藤)